

学びを選ぶ 学びをつくる

第1回

シユタイナー学園の1年

理想郷はあるか 人生観投影、親たちの選択

校舎を彩る八分咲きの桜。桜より少し濃い、水彩画のピンク色がにじんだような壁の教室。淡いペーじュのスーツを着た担任の小林裕子先生が子どもたち一人ひとりの名前を呼ぶ。呼ばれた子は前に出て先生と握手する。2012年4月7日。先生と子どもたちとの初対面。小林先生の手に名簿はない。新入生11人の名前と顔は、入学前に提出してもらった調査票を見て頭にたたき込んである。その後は、簡単なあいさつと歌、詩の朗誦。在校生保護者がつくった花のバスケットを渡し、行事は終わる。入学式としては至って簡素。お祝いの会といった様子だ。

ドイツの思想家、ルドルフ・シュタイナー(1861~1925年)の教育思想を实践するシユタイナー学校は世界で1000校を超え、欧米を中心に多くの国が公教育の一つとして認めている。「持続可能な社会の担い手を育む教育」としてユネスコ(国連教育科学文化機関)が認定した学校(ユネスコスクール)も多い。日本ではまだ異端視されがちだが、学校法人の認可を受けた2校を含め8校が開校、約1000人が学んでいる。冒頭の入学式の様子は、横浜市の北西部、JR



淡い色に包まれた入学式(7日午前)

横浜線の十日市場駅から環状4号線の桜並木の下を20分ほど歩いたところにある「横浜シユタイナー学園」のものだ。NPO法人が運営する小中一貫全日制のフリースクール。05年開校とまだ若い。1学年1クラス(8、9年生は複式)で、児童・

第1回

教育変える一石に

生徒数は110人と規模は小さい。教科書を使わない主要教科のエポック授業、8年生(中学2年)まで変わらない担任教師、点数評価をしない通知表、校長を置かない共同運営、独自に教育の理想郷を目指す……。シユタイナー教育と言って思い付くのは、これくらいだろうか。

その教育を、今年も11家庭が選んだ。何が彼らを引きつけたのか。新入生の保護者6人に文書で回答してもらった。まずは、その結果から見てみよう。

「公立学校など既存の公教育に不満があるか」を聞いたところ、「特に不満はない」が3人。一方で3人が不満や不安を感じている。うち1人は、猫の目行政の弊害を挙げ「現場の先生たちのご苦労はいかばかりかと思う。先生方のストレスもかなりのものでしょうし、そんな環境に自分の子どもを託すことはできないと思った」と記した。また「数字ばかり追っているように感じられる」「教師から生徒への一方向の教育」「自分自身の幼少期の体験により、安心を与えられる環境には遠いと思われた」との答えも。

では、「なぜシユタイナー教育を選んだのか」。これについては「子どもの身体的・精神的成長に合わせた教育内容だから」などと、子どもの発達段階に合わせた教育に魅力を感じた保護者が3人いた。

一方で、迷いも見られる。横浜シユタイナー学

園の場合、いわゆる学校としての公的な認可を受けていないため、学籍は本来の校区の学校に置き、学園に通学することになる。学籍を認めるかどうかは、その学校の校長裁量となっており、1人は「たまたま校長に理解があったので良かったが、異動で新しい校長が理解してくれなかつたらどうしようと思う」という不安を挙げた。「カリキュラムが他校と異なることで、子どもの中で混乱は起きないか、社会との折り合いを子ども自身がつつけていくのか、不安に感じることもある」といった意見もあった。

この他にも高校までが実質無償化となっている公教育と違い、保護者の費用負担が重いなど課題は十分認識している。それでも、横浜シユタイナー学園を選んだ。

わが子の学びの場を選ぶに当たっては、自分が受けた教育や経験が大きく影響し、人生観をも投影する。在校生の保護者に話を聞いた。

1期生である8年生（中学2年）の長女と4年生の長男を学園に通わせている水野仁美さん（45）は、広島県の北東部にある公立中学校で担任を持ち、英語を教えていた経験がある。統廃合が終わった後の荒れた学校だった。赴任した直後にガラス40枚が割られた。校舎の天井はほうぎの柄で突つかればこぼこに穴が開いていた。たばこの吸い殻でトイレがよく詰まった。教壇に立っていると、錐が飛んでくることもあった。インドのゴルフカートを1人で訪ねるほどマザー・テレサを敬愛する水野さんは「善い行いをして生きたい、と

いう思いはどこから来るのか。天をあがめるような気持ちなのだろうか」とまで悩んだ。

問題は複雑だった。原因の一つに点数主義があると、水野さんは感じ始めた。水野さん自身、良い点数を取ることが目標になり、高校時代に1時期、本来の学ぶ意欲を失った経験がある。

ある日、クラスの生徒が家出した。理由は「勉強をしない」と親に叱責されたことだった。生徒は親に「勉強はしている」と反論したが、「しているなら、テストでこんな点数になる訳がない」と取り付く島がなかったという。例えば、1点満点の問題。文章はおおむね書けている。勉強の跡は見られた。しかし、スペルが間違っていたら、1点をあげることができない。白紙でも同じ0点だ。

「これを見たら、またがっかりするだろう」と思ったが、水野さんはその生徒に「あなたが勉強しているのは分かっているから」としか言えなかった。「点数は要らない。持たなくてもいい劣等感を与える」。水野さんは自身の学生時代の経験も重ね合わせ、強く思うようになった。「本来、以前はできなかったものができるようになったと喜べばいいのに、点数があるとうとうしても他人と比較する。できる子にとっても良い点を取れたという優越感のために勉強することになる」と。

しかし、長いトンネルの出口は見えなかった。水野さんは教職を続けることを断念し、結婚を機に夫の待つシンガポールに向かった。長女はシンガポールで出産した。テストも点数による評価も

無い、シユタイナー教育には学生時代に出合っていた。帰国後、別のシユタイナー学校を見学した。自らの教職経験から、教師、家庭、地域が一緒につくっていくとうとする姿勢に共鳴した。そして「畏敬の念を育てる」という教育理念にも。今度こそは教師としてではなく、1期生の母親として深く学校づくりに関わることになる。

これは、現行教育制度を忌避し、新天地を求めた「教育亡命」なのだろうか。水野さんはこう話してくれた。

「亡命という言葉にアウトローな響きや逃げていくという意味があるのなら、決してそうではない。大きな望みとしては日本の公立学校を変えたいと思っています。テストをしなくても子どもたちは勉強する、と言っても今の世の中では通らない。この学園でそれが証明され、子どもたちが育っていることが分ければ、公立にも参考にしてもらえるのではないか。その一石になりたい。公立の中には悩んでいる子どもも親も教師もいっぱいいる。むしろ挑戦していると思っています」

シユタイナー

「娘を公立に入れなかったのは消去法的な理由なんです」と話すのは、7年生（中学1年生）保護者の千原由美子さん（45）だ。千原さん自身は滋賀県北部の町で高校までを公立の学校で過ごした。水野さん同様、勉強の目的を見失ったことがあるが、「勉強は得意な方だった。公立は私に合っていた」と言う。だが、長女の小学校入学に際

しては、公立の良さを知っているが故に、考え直すことになる。

当時、千原さん一家が住んでいた大阪府北部の市は教育熱心な土地柄だった。小学校卒業後、約2割の子どもが私立に進学する。「公立の良さは、いろんな子がいるところ」のはずだったが、勉強ができて、裕福だったりする家庭の子は中学段階で公立から抜けていく。中学受験を目指す小学生が夜遅くまで勉強しているのは、どう考えてもおかしいと思っていた。しかし、もし長女を公立小学校に入れば、高校受験よりは楽な中学受験をさせなくなるだろうとも。「だから、そこから逃げました」と、千原さんは屈託がない。

娘の学力へのこだわりはあった。千原さんのシユタイナー教育との出会いは、日本にシユタイナー教育を広めた子安美知子さんの著書「ミュンヘンの小学生」(中央公論新社)をたまたま読んだことだった。千原さんが魅力を感じたのは、「エポック授業」という一つの科目を毎日100分、3〜4週間続けて学ぶ授業方法だ。公立の窮屈なカリキュラムに比べ、「このやり方の方が高校卒業段階では絶対に力が付く」と思った。

教える中身も、いきなり文字を覚えるのではなく、絵から漢字の成り立ちを学び、そこから平仮名に移る方法は、子どもたち自身が何を学んでいるかが分かると考えた。そこに、夫の東京への転勤が重なった。夫の実家が学園の近くにあることもあり、学園への入学を決めた。

水野さんとは違う、学力という意味でシユタイ

ナー教育を選んだ千原さんの場合も教育亡命に見えるが、どうだろうか。

「亡命という強い言葉として意識したことはない。でも、この学校にすることでシユルターに守られているような感覚はあります」と千原さん。シユタイナー教育ではテレビやゲームなどバーチャル(仮想現実)なものには悪影響を及ぼすと考えられ、特に低学年では原則禁止。前述の通り、テストも成績評価も無いため、他の子どもと比較されることはない。温かい雰囲気の小さな社会で中学卒業までの9年間を守られて過ごすことになる。

入学説明会では「そんな環境で育った子たちが、現実の社会生活に適応できるのか」との質問がよく出るといふ。これについて、千原さんは「公立で鍛えられるというのは、駄目なところを直さないと言われ続けることに、慣らされているだけではないのか。適応ではなく慣れ。私はある時期、中学生まで、守られていた方が社会への適応力はつくと思う。娘は6年間を守られて育ち、最近は自分のやりたいことはどんどんやっていくという揺るぎなさを感じるようになった。自分の中に核、自己肯定感が育てば、すぐに倒れるようなことは無い」と自信を深めている。

次につなげる

学園はまだ卒業生を出しておらず、その先の進学や就職については未知数だ。学籍を取得できないことは、高校進学の壁になる。企業などで競争社会に身を置くことが多い父親は、どうみている

のか。

4年生の長男と2年生の長女を学園に通わせている安食和博さん(54)は、開発途上国に医療システムを導入するコンサルタンツ会社に勤務する。「勉強は嫌いだった」と言うが、その中でも興味を引かれた分野を学び、現在の仕事につながっている。これまで約50カ国で仕事をしてきた。安食さんは「自分の息子が受験勉強に向いているとは思えない」と笑い、私立などの小学校受験は考えなかった。一方で、公立にも課題を感じていた。

アフリカへの経由地だったドイツのフランクフルトでシユタイナー学校を見学したことがある。生き生きとした様子に引かれた。「教科書に合わせて勉強させるのではなく、パーソナリティーを考慮してくれる」と、シユタイナー教育を選んだ。安食さんは、日本の学歴社会はそう簡単には変わらないと思っている。一方で、「中卒・高卒認定試験もある。日本の学校制度にこだわる必要はない」とも考えている。アフリカのウガンダに赴任していた時のことだ。旧宗主国、英国の開発庁から派遣され、各国からの協調援助の取りまとめをしていたのは、大学を卒業したばかりの若い女性だった。女性はこのプロジェクトが終われば、また大学に戻ると話していた。大学と仕事現場との循環は、日本の大学を卒業し、日本の企業に就職した安食さんには新鮮に映った。

「勉強が仕事につながり、仕事が勉強に生かされる。英国とウガンダでの時間を含め全てがつながり、生活の中で勉強する意味を人生の意味とし

て感じられるのではないか。大学受験が終われば勉強は終わり、3年生からは就職活動という日本のシステムは効率が悪い。子どもたちは語学さえできれば、高校から海外で勉強して仕事など生きていることにつながることを目指してもいい。教育は次につながる事が重要だ。学園はインキュベーター（育成施設）として次につながるという手応えはある」

取材に応じてくれた3人の保護者たちが求めている教育の理想は、突き詰めれば国の学習指導要領が掲げる「生きる力」に期せずして符合する。小学校で11年度から、中学校で12年度から本格実施された学習指導要領にはこうある。

「児童・生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童・生徒の発達の段階を考慮して、家庭との連携を図りながら……」

外形的には公教育に背を向けた「教育亡命」にも見えるが、指導要領を先取りした「生きる力」を付けさせる教育を、小規模ながら自分たちなりに愚直に求めているようにも映る。

最初の授業

前述の水野さん、千原さんは同い年。受験戦争を生き、バブル期に社会に出たという世代的な共通項がある。テストで良い点を取り、世間的に良いとされる学校に入り、良い会社に就職することが目標とされてきた。「勉強は人よりいい暮らし

をするための手段になった」と千原さん。右肩がりの経済は、それをある程度実現させた。

しかし、その過程で学びの意味を見失った。「何のために勉強するのか」という疑問に悩み、答えを得られないまま、あるいはふたをして、今度自分たちの子どもを学ばせる立場になった点も共通している。

「高校でぐれましてね」と振り返る、横浜シユタイナー学園6年生担任の横山義宏先生（50）もその1人だ。中高一貫の私立の進学校に受験して入学した。大学受験が大きな目標の学校だった。高校の教師には「まずはいい大学に行け」と言われた。が、目的が分からないまま勉強することはできなかった。高校を卒業して、パン屋で働いた。

その後、浪人していわゆる有名私立大学の教育学部に入ったが、「そこでまた分からなくなった」。教員免許は取得しないまま大手百貨店に就職。

「何となく流されて生きるのもいいか」と感じていたときに、長女が生まれた。

長女に「どんな大人になってほしいか」「どういう教育を選んだらいいか」を考えるようになって、再び高校時代から繰り返し感じてきた疑問に立ち返った。「何のために勉強するのか」。図書館でたまたま手に取った本がシユタイナー教育に関するものだった。高校時代から漠然と教師になる夢はあった。横山先生は教育学部出身であり、シユタイナー教育の存在は知っていた。学生時代は全く関心を持てなかったシユタイナー教育を、この時は「面白い」と思った。

当時39歳。大手百貨店を辞め、単身ドイツに渡り、ゼロからドイツ語を学ぶことから始めた。1年後に家族を呼び寄せ、その後3年間シユタイナー教育を学んだ。「子どもの成長に合ったことを教える。教育現場が子どもの心の鏡になっていた」と思った。横山先生は横浜シユタイナー学園の教師になった。

何のために勉強するのか。横山先生をはじめ、取材に応じてくれた保護者たちにも納得できる答えが、シユタイナー教育にはあった。

「自分のためだけでなく、人のため、世界のために働ける大人になるために学ぶ」

簡素な入学式の後の最初の授業で、今年の11年の新入生も小林先生から勉強することの意味を学んだ。子どもたちができないことをできる大人に対する敬意とともに。そして権威者である先生をまねて、一人ひとりが1本の直線と曲線を黒板に書いた。シユタイナー教育では、直線と曲線はこれまで体をつくっていた力が世界に向かっていることを表象する意味があるという。さあ、世界と出会う授業の始まりだ。



「教育亡命なのか」との問いに、学園の人たちは「そうではない」と言う。一方で、学園は公教育にはない課題も抱える。シユタイナー教育とは具体的にはどんなものなのか。横浜シユタイナー学園を舞台に、子どもや保護者、先生たちの1年間を追い、その魅力を探る。（原則月1回掲載予定です）

（田橋秀之 内外教育編集部）